

19th ICFIA 参加報告

山形大学大学院理工学研究科 水口仁志

山梨大学大学院総合研究部生命環境学域 鈴木保任

さる 11 月 30 日（日）から 12 月 5 日（金）までの 6 日間にわたり、福岡市のアクロス福岡において 19th International Conference on Flow Injection Analysis and Related Techniques（19th ICFIA）が開催されました。昨年 9 月の 18th ICFIA から 1 年、日本国内での開催は 15th ICFIA（オーガナイザー：酒井忠雄先生、本水昌二先生、名古屋）以来 6 年ぶりとなります。今回は、今任稔彦先生のお世話のもとで、フローインジェクション分析研究懇談会創立 30 周年記念講演会を兼ねての開催となりました。

会場であるアクロス福岡は、福岡市の中心である天神駅から地下道直結、徒歩 3 分、福岡空港からも 15 分程度という交通至便な場所に位置しています。海外から参加された方々にとっても、私たちのように陸の孤島（？）からやってくる国内の参加者にとっても非常に便利でした。会期前半はあいにくの雨模様でしたが、エクスカーショが行われた 12 月 3 日以降は天候も回復して晴天に恵まれました。山梨のような寒い地域から参加するとさほど寒くはなかったのですが、タイやインドネシアといった暖かい国から来られた方にはちょっと寒かったかもしれません。

参加者の総計は 217 名で、そのうち海外からの参加者は 120 名、国内は 97 名（留学生含）でした。招待講演（講演時間 20 分）は 14 件、一般の口頭発表（同 15 分）は 23 件、若手口頭発表（同 10 分）は 29 件、ポスター発表は 104 件でした。参加者はアメリカ、イラク、インドネシア、エジプト、オーストラリア、カナダ、スウェーデン、スペイン、スロバキア、タイ、台湾、チェコ、中国、ブラジル、ポーランド、ポルトガル、南アフリカ、ロシア、そして日本と、19 の国と地域に及んでいます。

初日は夕方から参加登録が始まり、同会場内でウェルカムレセプションが開催されました。お寿司を中心としたたくさんの料理と、様々なお酒が振る舞われました。海外からの先生の多くが焼酎を前に悩んでおられましたが（日本酒と思われていたようです）、当方（鈴木）まったくの下戸と貧弱な英語力のため、清酒と蒸留酒である焼酎の違いを説明することができませんでした。

2 日目からセッションが始まり、最初の招待講演は G.D.Christian 先生の“Talanta, JFIA, and ICFIA – a history”と題する講演でした。ICFIA 及びその前身である Winter Conference on Flow Injection Analysis (WCFIA) とご自身が長らく編集委員長を務められている Talanta 誌の特集号について、また、本 JFIA 誌や先生の Trends in Analytical



11 月 30 日 ウェルカムレセプションの様子



レセプションにて。左から、鈴木、戸田先生、水口

Chemistry における学会の報告などについて、歴代の編集委員の先生の写真を交えて講演されました。以降、招待、一般の口頭発表が続きました。いずれも熱のこもったプレゼンと質疑応答で時間がオーバーしがちでしたが、今任先生の適切な時間コントロールにより、全体として大幅に時間が超過するようなことはありませんでした。午後はポスター発表から始まり、ここでも熱心なディスカッションが繰り広げられ、1 時間半と比較的長いコアタイムを設けてあったにも関わらず、時間が足りないくらいの盛り上がりでした。この熱気は、2 日目を以降もまったく同じでした。

今回、鈴木は恥ずかしながら発表をさぼってしまい、みなさんの発表を伺っていただけになってしまいましたが、FIA の分野では、他では少なくなりつつあるハードウェアの開発に関する発表が多く、刺激を受けることができました。特に、誘電体バリア放電を利用した新しい発光検出器、膜を用いない気液分離装置、スマートフォンを用いる簡易



講演会場の様子



エクスカーションの観光バスにて



ポスター会場の様子

なオンサイト分析装置など、非常に興味深かったです。また、P.K.Dasgupta 先生の火星探査のお話に出てきた「自転車のパンク修理用ガスボンベ」は、とても参考になりました。何かの折に使ってみたいと考えています。

なお今回の ICFIA では、ポスター発表ならびに若手口頭発表での優れたプレゼンとディスカッションに対して優秀発表賞が贈られました。口頭発表では 10 件が選出され、このうち日本の学生では、Alejandro Ayala さん（愛工大）と白石有希さん（神奈川工大）が選ばれました。一方、ポスター発表では 20 件が選出され、このうち日本の学生では、小島弘誓さん（群馬大）、中田啓之さん（大阪府大）、中村行秀さん（熊本大）、郭帥さん（九州大）と木下隆将さん（大阪府大）が選ばれました。表彰式は最終日の Closing Remark において行われ、G.D.Christian 先生から受賞者に賞状が贈られました。なお、全受賞者のお名前は、19th ICFIA のホームページに掲載されています。

エクスカーションは、会期 4 日目（12 月 3 日）に、日田豆田町商店街の散策と別府地獄めぐりツアーが企画されました。参加者は、ICFIA 会場であるアクロス福岡前から 4 台の観光バスに分乗して出発。九州自動車道、大分自動車道を経由しておよそ 2 時間、最初の目的地である豆田町商店街（大分県日田市）に到着しました。日田は江戸時代に



日田豆田町商店街を散策する参加者



参加者集合写真（サッポロビール九州日田工場にて）

幕府の直轄領として栄えた歴史ある城下町です。豆田町商店街には、古い家屋や資料館のほか、お茶や和菓子、箸置きなどの生活用品、日田土鈴をはじめとする工芸品を陳列した店が立ち並び、風情のある町並みが見どころの観光地です。多くの商店の軒先や資料館の入口には「白々（パイパイ）」と呼ばれる魔除けの飾りが付けられており、こうした地域伝統文化の根付く生活風景は、我々日本人には、ほの



別府地獄めぐり（海地獄にて）



鬼石坊主地獄にて



龍巻地獄にて



足湯を楽しむ参加者（血の池地獄にて）

かに懐かしさを感じさせてくれます。参加者はこの商店街をおよそ 1 時間にわたって散策。土産物や菓子を購入したり、町並みを背景に記念撮影したり、思い思いに日本の文化に触れる姿がとても印象的でした。その後、サッポロビール九州日田工場に移動して昼食を取った参加者は、ビール工場のシンボルである発酵タンクを背景に集合写真を撮り、さらにバスで東へ 1 時間、別府地獄めぐりへと向かいました。別府市北部の鉄輪・亀川の一帯では、古くから噴気、熱泥、熱湯が噴出しており、含有成分の違いや間欠泉のような噴出形態の違いが、それぞれの源泉付近において特徴ある景観を創り出しています。地獄と呼ばれるこれらの源泉を訪ね歩くツアーが、別府地獄めぐりです。今回は数ある地獄のうち、美しいコバルトブルーの池を擁する「海地獄」、灰色の熱泥が沸騰する「鬼石坊主地獄」、まるで絵に描いたような赤色の「血の池地獄」、別府市指定天然記念物の間欠泉である「龍巻地獄」をめぐり、参加者はカメラを片手に自然の美しい景色を楽しんでいました。血の池地獄の敷地内では足湯に興味を持たれた方も多く、私(水口)も堂々と靴を脱ぎ捨て一緒に楽しませていただきました。

バンケットは、会期 5 日目（12 月 4 日）、博多駅の北にある石蔵酒造博多百年蔵にて開催されました。しばらく食事と歓談を楽しんだ後、併設のホールにて、鏡開きに引き

続いて FIA 各賞の授賞式が執り行われ、このたびの学術賞受賞者である Jian-Hua Wang 先生（Northeastern Univ., China）、技術開発賞受賞者である Don Olson 先生（Global FIA, USA）、および 6 名の進歩賞受賞者の方々（詳細は別記事参照）へ、今任先生より賞記と記念メダルが授与されました。また、FIA の発展に対する長年のご貢献に感謝し JAFIA より本水昌二先生、小熊幸一先生、酒井忠雄先生、Marek Trojanowicz 先生（Univ. of Warsaw, Poland）へ、またこのたびの JAFIA 創立 30 周年をお祝いして Christian 先生ご夫妻より今任稔彦先生へ、いずれも Christian 先生ご夫妻がプレゼンターとなって記念の楯が贈られました。余興では、博多伝統芸能（黒田節、正調博多節、博多どんたく）が上演されました。大きな盃と槍、あるいはしゃもじを手にした舞踊を写真に収めるべく、多くの参加者が手を高く伸ばしてカメラを構える様子は大変印象的でありましたし、「ぼんちかわいや」に合わせて会場を練り歩く踊り子さんの列に続いて一緒に踊る参加者のノリの良さもまた、ICFIA コミュニティーの雰囲気の特徴と言えるかも知れません。この後さらに、受田先生ご提供のビンゴゲーム、板橋先生ご提供の Special quiz in ICFIA by Ita-san と、余興はまだまだ続きます。ビンゴゲームの優勝賞品はなんと小型のスイーツケース。お土産



鏡開き（石倉酒造博多百年蔵にて）



FIA 進歩賞受賞者の方々

をたくさん買って帰れるようにとのことで、実に「粋」なアイテムです。クイズ大会においても、国内学会の懇親会ではおおよそあり得ないほどの盛り上がりでした。そして終盤、タイから参加された方々が壇上に集まり、Duangjai Nacapricha 先生 (Mahidol Univ.), Orawon Chailapakul 先生 (Chulalongkorn Univ.) より今任先生へ記念品が贈られました。今回は特にタイから 55 名もの方々が参加され、19th ICFIA での存在感は圧倒的でした。こうして、終始笑顔の絶えなかった約 3 時間にわたるバンケットは大盛会のうちにお開きとなりました。

19th ICFIA が開催された 6 日間、振り返ればあつという間に過ぎ去った感がありますが、多くの場面で徹底されたジャパニーズスタイルは、とりわけ海外から参加された方々にとって日本の文化を大いに堪能する機会になったものと思いますし、海外からの参加者が国内よりも多かった国際会議として大成功であったと言えます。お世話いただいた今任先生、中野先生、石松先生、三木様、ならびに学生の皆様、そして本会を盛り上げるべくご尽力下さったすべての方々に心から感謝申し上げます。さて、来る 2015 年 7 月は Petr Solich 先生 (Charles Univ. in Prague) のお世話のもとチェコ共和国のプラハにて Flow Analysis XIII が開催さ



記念品贈呈



クイズ大会で盛り上がるバンケット会場

れ、さらに 2016 年には第 20 回 ICFIA が Víctor Cerdà 先生 (Univ. of the Balearic Islands, Spain) のお世話のもとでスペイン王国のマヨルカで開催される予定です。ぜひ多くの皆様にご参加をいただければ幸いです。

※本記事に掲載した写真の多くは、九州大学の三木様が撮影されたものです。重ねて感謝申し上げます。